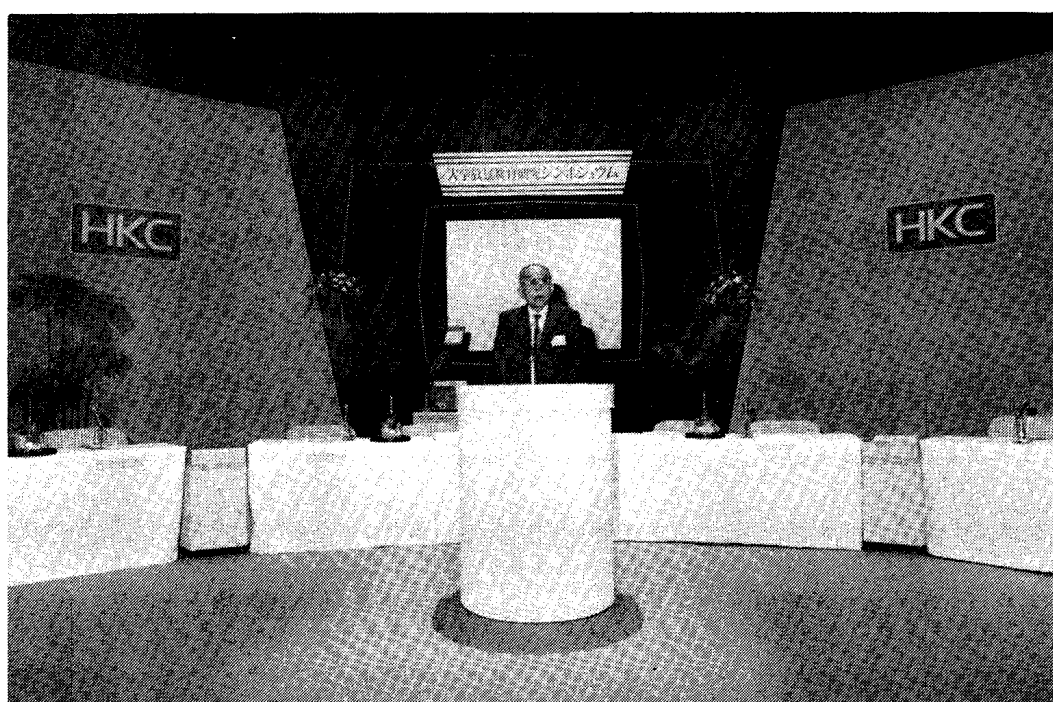


開会あいさつ

放送教育開発センター所長

天城 勲



大学放送教育研究シンポジウムも今回で第4回を迎えることになりました。昨年から、場所が必ずしもよくないんですけれども、この幕張で開くことになりまして、今回も各地から遠路幕張村にお集まりいただきました。心からお礼申し上げます。

ご案内のように、放送大学はこの11月から放送局の方も本免許がおりまして、すでに予告放送を始めております。12月から学生募集も始めて、いよいよ4月からすべての講義がオンエアされるという段階にきたわけでございます。学生募集の状況につきましては、まだ進行中でございますが、当面のところは予定の線をまあいっているんじゃないかと思っております。

さて、大学放送教育という領域は大変新しい領域でございます、当センターも、53年の開設以来、実験番組を放送しながら多角的な検討を進めてまいったわけでございますが、理論どおりにいかないこともたくさんございますし、また、理論もなかなか固まりかねる領域で、実験を繰り返し重ねてまいりますと問題に迫れないという宿命がございます。幸いに、いままでありました幾つかの研究結果は放送大学の新しい発足にも活用していただいておりますし、また、実験番組の多くのものも、放送大学の再検討を経てそのまま活用していただけることになっております。

実はいま申し上げましたように研究開発領域というのは非常に広いものですから、私たちの研究ノート「MME」は、少なくとも映像と音声、それに文字、これは印刷教材でございますが、それを中心として、あと、通信指導ですとか面接とかを研究対象として含んでおります。そういった教育の媒体ないし手段が非常に多様化した中でこの問題を考えていく必要があると存じます。放送教育ですから放送のウェイトは非常に高いんですけれども、放送の持っているメリットと同時に、その限界もございますし、多媒体の中で、

放送の持っている意義を十分に発揮していかなきゃいけないんじゃないかという考え方で、センターとしては多角的な研究を進めているところでございます。

去年も申し上げましたように、放送教育開発センターでは北海道大学から熊本大学まで、七つの大学で公開講座を放送を利用してすでに始めておりまして、七つの大学とも共同研究を組んで、いろいろな新しい手法なりプログラムなり、また、視聴の状況についての研究を進めてきております。これも回を重ねるに従いまして個別大学の考え方が入ってくるために、多様な展開ができてきていると、大変期待をしているところでございます。

今回は時間も限られて2日間のシンポジウムでございまして、われわれがやってまいりましたいろんな研究、特に、開学を控えた放送大学の発展に対して最も適したテーマを選ぼうと思って、いろいろ考えたわけでございます。まとまって発表できる段階にきたもの、まだ試行錯誤の過程にあるもの、いろいろございまして、テーマの選定には大分苦労いたしましたが、お手元でございますように、大きく分けて四つの課題についてシンポジウムを展開いたしたいと考えております。

それぞれの段階でまたご説明がございしますが、選びました理由だけちょっと申し上げますと、第1セッションでやります『学習指導の方法をめぐって』というのは、大変細かい手段を講じてやったんですが、これはある意味では、放送による教育の場合にどういうインセンティブが一番いいかということございまして、放送している番組が学習指導という面からどういう意味を持っているかということねらいとした、学習促進方法といってもいいと思いますが、そういうねらいから始めたものでございます。しかし、当然これは、結果がフィードバックされてこなきゃならぬ。現在教育で非常に大

きな問題の、アセスメントとフィードバックという考え方をもとにしてやってみた、一つの具体的な実験でございます。

それから第2セッションの語学の問題でございますが、大学における語学教育に関してはすでに放送番組もたくさんございますし、語学の学校もたくさんあるんですけれども、大学の単位を伴う放送による語学教育はこれが初めてでございます。英・独・仏語の関係の方々にご登場願ってやろうというわけでございます。これは大変むずかしい問題だろうと思っております。

それから第3セッションの、『教育需要をめぐって』という表題は必ずしも適当でなかったんですけれども、これは放送大学をだれがどれくらい聞かかというようなことを考えているだけではございませんで、あくまでもこういう教育に対して、視聴者と申しますか、学生側がどういう態度で臨むかということです。最近、ファカルティを中心としたユニバーシティーから、スチューデントを中心としたユニバーシティーへ、という考え方が主張されてきておりますが、放送大学の従来の伝統的な大学とかなり違う一つの使命——スチューデントを中心としたユニバーシティーをめざすというところに、実は問題意識があるんですけれども、それをできるだけ具体的なデータでご発表願えればと思っておりますのでございます。

それから、第4セッションは大変広範なようでございますが、これは、放送大学というその＜放送＞の意味がすでにかなり多様化してまいりましたが、放送大学の一つの意味は、いわゆる遠隔大学というところにポイントがあるわけでございます。遠隔大学をめぐっては、世界的に、いわゆるニューメディアの発達と関連して、きわめていろいろな姿が提示されておりますし、日本でもことはニューメディア元年といわれているくらいで、かなり技術的なものが先行しているきらいはございますけれども、将来これが大学

教育に一体どういうふうを活用し得るのかということも考えていく必要があるということから、やや将来展望の意味で最後のセッションを設けたわけでございます。

そのほか、いままでやっております私たちのセンターでの研究開発は小さまざまございまして、すべてをここできょう発表したり、それについて皆さんのご意見を伺うことができませんが、またお話の過程でそういう議論がわれわれの方の仲間から出るかもしれませんけれども、主旨はそういうことでございますので、よろしくご協力をお願いいたしたいと思っております。

場所が場所でございますが、いろんな点でご不便が多いかと思っておりますけれども、2日間のこのシンポジウムを意義あるものにするために、積極的なご協力を心からご来たい申し上げまして、開会のごあいさつにかえさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。ありがとうございました。